

## 実施報告書

医学科 5 年 M.S (Male)

### 【渡航先】

ISOQOL(International Society of Quality of Life Research) 2013 Annual Conference

### 【目的】

国際学会に参加し、oral presentation を行うこと、多分野のQOLに関する研究に対する見識を深めること、さらに様々な研究をしている世界の研究者たちと交流を深めることを目的とする。

### 【スケジュール】

10月9日 symposium' Innovations for Patient Engagement in Health Outcomes Development, Selection and Measurement: Opportunities and Limitations

’に参加

10月10日 poster session、oral session' Positive Psychology/Life Satisfaction

’に参加

10月11日 plenary' Accentuate the Positive: The Sunny Side of Quality of Life Research

’、oral session' Caregiver Health’に参加

10月12日 business meeting and awards presentation に参加、oral presentation 'Is there any difference on Quality of Life between hospital doctor and practitioner?'の発表、closing dinner への参加

### 【成果】

4年次での環境医学実習の際に国立循環器病センターの萬代先生の指導のもと、勤務医と開業医に関してQOLの観点から比較研究を行った。2013年10月9日～12日に開催されたマイアミでの国際QOL学会にて勤務医と開業医のQOLの差に関して oral presentation を行った。

9日～11日は poster session や oral session、symposium に参加し、多くの研究発表を聞いた。poster session や oral session ではたとえば介護者のQOL、QOLを解析する際の統計学的方法論、がんを持つ人のQOLに関する発表を聞いた。また symposium では有名な先生方の講義や今世界で注目を集めている話題に関する講義を聞いた。

学会の最終日である12日にはまず business meeting and awards presentation に参加した。今の国際QOL学会に関しての会議で、資金状況を始め次回の国際学会の説明などを聞き、さらに優秀な presentation には賞の授与も行われていた。

次にoral presentationを行った。自分のsessionは米国Mayo Clinic及びJohns Hopkins 大学との計 3 演者による Oral Session: To Thine Own Self Be True であった。Oral presentation 後の質疑応答では、勤務医、開業医ともに QOL を上げるためにはどうすべきだと考えるかという質問に答えた。Oral presentation では、うまく発表できるか、質疑応答もできるかなど緊張や不安もあったが、ともに自分なりにうまく終えることができ、安堵と同時に達成感も感じた。また米国 Mayo Clinic の Jeff Sloan 先生は外科医の QOL に関する発表を、Johns Hopkins 大学の Anawin Sanguankeo 先生はタイ王国の研修医の QOL についての発表を行った。

最後に closing dinner に参加した。この場ではお酒交じりで世界の研究者たちとフランクに会話をすることができた。特に透析をテーマに研究しているノルウェーの先生とお互いの国の話も行い、さらに研究内容について長時間話すことができた。

#### 【今後の抱負】

国際学会に参加したのは今回が初めてで、あらゆることが目新しく、刺激的であった。学会がどのような足運びで、またどのような雰囲気で行われているかを知ることができただけでなく、世界的に有名な先生方の講義では学校で学ぶことのできないことを学ぶことができたと感じた。また、どのsessionでも多くの人が積極的に演者に質問を投げかけており、この風景は日本では見られることのないものであり、世界の人々の熱意に非常に圧倒された。海外の人のこの積極性は自分自身にも必要なものであり、次回このような機会があればもっと積極的に質問をしていきたいと思った。

学生時代に英語でoral presentationを行うことができ、非常に貴重な経験をすることができた。この経験は将来どの分野に進んだとしても、研究発表などの機会に役立つと思う。それと同時に今回の発表では英語の必要性を痛感した。発表するだけでなく質疑応答、さらには議論を深めていく際に英語ができなければ世界に発信していくことができないことを、身をもって感じた。日本の英語教育はもっと盛んになるべきであり、自分自身もさらに英語の勉強をしなければならないと思った。今後oral presentationを行う機会があれば、さらに上手に発表できるように英語の上達に邁進していきたいと思った。